

「聖書序文」にみるルターの信仰と神学

石居基夫

一 序

「聖書序文」は、もちろん、ルターの聖書翻訳が出版されるときに書かれたものだが、本来、聖書にない文書をなぞつけることになったのか。それには理由がある。ルター訳聖書の出版によって、いわば初めて聖書に直接触れる人たちに対し、中世の教会の教え、その神学の傾向が、聖書を読むことの邪魔をしないようにするためなのだという。純粹にみことばに聞くことができるため、つまり、福音に与ることへと導くため、ルターはこの序文を書いている。なぜなら、ルターにとっての聖書はキリストを宣べ伝える神のことばそのものであり、その権威も意義も、ただそれが福音を宣べ伝えるものであるかどうかという点において定まってくると考えられてい

るからだ。それだけに、福音に与るために書かれたこの「聖書序文」は、ルターの福音理解をある意味で最も端的に表現しているとも言える。

そうであれば、おそらく、この聖書序文を学ぶ時、私たちはルターの「信仰義認（神の恵みのみによって、信仰を通してのみ、人は義とされる）」とは何かを確認することになるだけに過ぎないのだろう。けれども、この学びを通して少なくともルターの神学的確信にとつての聖書の存在について、そして、そのルターの福音理解とは何かということについて、しっかりと確認できるように思う。

そして、この小論においては、ルターの信仰的確信を、現代的な脈絡の中で考察することに努めたい。特に、教皇フランシスコ、および教理省による「プラクイト・デオーキリスト教的救いのいくつかの観点をめぐる、カトリック教会の司教たちへの書簡」において著された、「ネオ・ペラギウス主義」および「ネオ・グノーシス主義」の支配的な影響という問題を受け止めるべきだろう。この二つの傾向は次のように説明されている。

現在広がっている「ネオ・ペラギウス主義」というべき傾向は、急進的に自立した個人を生み、「自分の存在が、その奥深いところで神や他人に依存している」ということを認めず、「自分自身を自分だけで救える」と考えさせる。そう考えると、救いは、「本人の力だけ」に頼るか、神の聖霊の息吹を受け入れることのできない「純粹に人的なシステム」に頼ることになる。

また、「ネオ・グノーシス主義」といえる傾向は、自分の中に閉じこもり「純粹に内的な救い」だけを求めさせる。「人は、自分を肉体や物質的宇宙から解放できる」と考え、創造主の摂理に満ちた手を発見する

ことなく、「人間の都合に合わせて変質可能で、意味の無い現実」だけを見つめることになる。⁽¹⁾

こうした傾向の背後にはいくつかの流れがあることを念頭におく必要があるだろう。一つは西欧型個人主義、さらにはアメリカ型自立主義の価値観のグローバリズム、また、ICT（情報通信技術）の新時代がもたらした孤立化と価値の多元的世界の出現。特に、そのICT新時代の到来は、新しいコミュニケーションを可能にしたが、同時にそれによって身体性と時空を超える超越性を見出し、仮想世界の無限の広がりと可能性を魂のそばに引き寄せた（私はこれをITプラトニズムと呼んできた⁽²⁾）と言えるだろう。こうした現代文明によってこそ、ネオ・ペラギウス主義とネオ・グノーシス主義が現れることになったといえる。それは、すでに七〇年代までにその始まりをみるニューエイジの潮流⁽³⁾に見ることもあったが、九〇年代後半のパソコンとウェブ、さらに二〇〇〇年代になってからのスマートフォンをはじめとする携帯型のデバイスの普及によって加速度的に世界に広がっている。

日本の中に今日見られる、自立至上主義、自己責任論、功績主義、競争原理などの考え方も、こうした世界的潮流の文脈において捉えられなければならない。そして、これらの考え方は、ある意味で弱い者を切り捨てていく論理でさえある。また、内的な救いのみに関心を向け、個人のスピリチュアルなものを求めるネオ・グノーシスは、現代人を社会的矛盾から遠ざけ、リアルな世界にコミットしないという傾向も作り出している。

こうした時代背景があつて、またそれぞれに困難を抱えていく人々がある中で、「信仰義認」は、本来はすべての人々に神の救いによって新しく生きる力を与えるはずであるが、容易に「信じるものは救われる」という言

葉に取って代わってしまう。そうになると、それはもはや、信仰義認が本来持っている神との関係性とは全く違って、自分が自分を信じ（つまり信じるに値する自分であることを無理にでも確信して）、自己実現を目指し勇気を持つて生きよう！といった信念のようなものと混同されてしまうのだ。⁽⁴⁾ あるいは、そういう自分たちには未来に希望があるとおそらく根拠もなく信じこもうとさせるのだ。「信仰義認」は、この時代の言葉の中にまぎれてしまいかねない。こうした状況への危惧が、「信仰」という言葉を控え、「恩寵義認」⁽⁵⁾（ネオ・ペラギウスに対するネオ・アウグステイヌス主義！）と言い換えて、神の恵みの一方的な働きとしてのキリストの救いを示さういうことにもなっているようにも思う。

ただし、こうした言い換え、すなわち、「信仰」ではなく「恩寵」と言い換えることで、「全ての人はすでにキリストにおいて救われているのであって、福音の宣教は、それを知らしめる、気づかせるためのものである」という論理が持ち込まれやすい。いったい、信仰は、神の恵みによってすでに与えられた救いについての「気づき」もしくは「意識化」にすぎないのか。そうであれば、信仰は本来に必要なのだろうか。気づこうが気がつくまいが救われているということであるなら、今更宣教することは必要もなくなる。果たして、信仰なしに救いはあり得るということになってしまふのか。こうして、信仰も救いも全てが何ものでもなくなっていくということにならないか。

改めて、ルターの「信仰」と「神学」を、この機会に確認したい。

二 本論

1 ただ「キリストのみ」の福音の中心性

例えば、ルターはその新約聖書の聖書序文の中で、諸々の書物の中で「どれが新約聖書の真の、最も高貴な書であるのか」という問いに答えて、「ヨハネによる福音書とパウロの手紙、特にローマの信徒への手紙、ペトロの手紙一が全ての書の内で正しい核であり、真髄であり、当然第一のものであるべきであるからである」という。もちろん、こうしたルターの言い方が、ヤコブ書を「藁の書」ともいうのだが、ルターにおける神のことはとしての聖書への批判原理は、ただ、キリストの福音がいかにかに明らかにされているかという一点にある。すなわち、ルターがヨハネ福音書やパウロ書簡などを高く評価するのは、これらの書に「キリストを信じる信仰がいかにかに罪と死と陰府に打ち勝ち、いのちと義と救いを与えるかが多く示されていることを見出す」からであるといひ、「これこそ、あなたが聞いたとおり、福音の正しいあり方なのである」といっているのである。

ここには、ルターが、「福音の正しいあり方」としてどのように十字架と復活を理解し、それをもって神のこゝとばを理解したかということが端的に示されている。そして、この聖書序文において示されているルターの福音理解は、アウレン⁽⁸⁾によって主張されたように「勝利者キリスト」の道筋であり、充足説ではないことも確認したい。もちろん、ルターの著作全体を見れば、いわゆる充足説にあたるキリストの犠牲についても語られないわけ

ではないが、⁽⁹⁾少なくとも「新約聖書序文」にはそうした表現は一切見あたらない。

すなわち、中世の神学的な構造が人間の功績によって救いに至るといふ枠組みを示していたことへの、ルターのはっきりとした態度表明とも取れる。救いの道筋において人間の側の業（功績）の必要性を一切語らずに、ただキリストのみによって実現される、神の愛、恵みの業に軸足をおくルターの神学的な立ち位置が確認できる。だ。「恩寵義認」が主張される所以でもある。

2 信仰における神の業

さて、こうしたキリストの働きによって表される救い、福音への信仰とは、一体どういうものであるのか。少し長くなるが、ルターがロマ書の序文に記しているところを確認しよう。

『信仰』とは、ある人たちが信仰だと考えているような、人間的な妄想や夢ではない。そういう人たちは、生活の改善やよい行いが結果せず、しかも信仰について多く聞かれ、語られているのを見ると、誤りに陥って、『信仰では十分ではない、正しい、救われたものとなるには、行いをしなければならぬ』という。彼らは福音を聞いても、これに襲いかかって、自分の力で自分のために、『私は信じる』というひとつの思いを作り上げて、これを正しい信仰と考えるようになる。しかし、これは、心の底となんらかかわりのない、人間的な思い付きや考えであるから、このような信仰はなにも行わず、そのあとにいな

る改善も結果しない。

しかし、信仰は私たちのうちにおける神の働きである。この神の働きは私たちを変え、私たちを神によって新しく生れさせ——ヨハネによる福音書第一章〔二節〕——古いアダムを殺して、私たちを、心、勇気、感覚、あらゆる力を持った別の人間とし、聖霊をもたらす。信仰とは真に、生きた、勤勉な、活動的な、強力なものであって、絶え間なしによいことをすることができるとのである⁽¹⁰⁾。

つまり、ここでははっきりと信仰が神の業であるということが述べられている。しかしそれは、私がこの信じようもないことを信じるということが、神の働きによる以外にないというような単純な意味で言われているわけではない。むしろ、先に語った、あのキリストの勝利の出来事が、この信仰者のうちにおいて、その信仰者のためになされたということなのだ。もちろん、二千年前の十字架によって決定づけられた出来事であるが、同時に、あの『奴隸的意思』⁽¹¹⁾において示されたように、信仰者を舞台とした神と悪魔の戦いにおいて、その一人ひとりを神が悪の諸力から奪い返すことによって達成されていく出来事でもあるということだ。そうして、この人のうちに神ご自身の働きが起こり、「絶え間なしによいことをする」奇跡が起こるといふのだ。

その出来事は、まさに聖書のみことばに信仰者が与ることそのものの中にある。ルターが「信仰が神の業」というとき、それはこの生きたキリストの出来事に与るという意味で、信仰は神の業というのである。

3 みことばと信仰

それでは、このみことばに与るといふことはどういうことなのか、それをもう少し詳しく見てみたい。聖書と、そのような福音の出来事とはどういう関係なのか。ルターは大変興味深いことを言う。

もし私がキリストの働きか説教か、いずれか一つを断念せねばならないとするとでもしたら、説教よりも、その働きを断念しようとするだろうからである。働きは私にはなにも助けにならないだろうが、いのちを与えるみことばは、キリストご自身が語っておられるとおり、「ヨハネ六章六三」、私の助けとなるからである。^(註)

もちろん、究極的な問いとして考えることなのだが、ルターは非常に大胆な言い方によって、「みことば」の中心性を示す。もちろん、聖書に必須のものとして、キリストの働きを記録することか、それともその説教かという究極的な問いである。そして、ルターはここに説教を掲げた。つまり、出来事の記録ではなく、その意味を受け止め、分かち合う言葉をこそ重要なものとして考えている。なぜなら、その出来事の記録そのものは何の役にも立たないが、その意味を分かち合う言葉は、私の助けになるといふことだ。

一見すると、ブルトマンが聖書に書かれたことがらを非神話化することで、現代的脈絡の中に再解釈するとい

う、実存主義的手法による聖書理解に近いことを示しているようにも見受けられる。しかし、もしルターの聖書に対する態度をそのように理解するならば、大きな誤解をすることになる。

まず、少なくともこうした実存主義的解釈は、信仰を結局のところ、イエスという優れた倫理・宗教的模範に従う個人の決断の問題に貶めることになる危険を持っているということだ。そして、この立場は宗教的な個人主義とネオ・ペラギウス主義に墮する傾向を孕むことになる。

ルターにとつての福音の出来事は、神のことばによる、神の業が今ここに働くという信仰なのだ。そのことは、単なるキリストの働きの記録があるということではなく、説教としてそのみことばが聴くものに直接働きかける。その意味で、聖書はただ聖書としてそこにあるだけでは、神のことばとしては働かない。それは、説教でなければならぬのだ。ルターにとつては、「説教された時だけ、みことばは福音であつて、キリストの全部を与える」⁽⁸⁾のである。

二千年前の十字架の出来事は、この説教とそれを受け取る信仰においてのみ、その人に働く出来事となるのだ。だから、すでに「救い」はすべての人に与えられていて、それに気づけば良いのではなく、説教と信仰において始めてその人に現実となる。

こうして、説教として神のみことばが働くときに、人の業によらない、ただ神の働きとしての信仰がそこにあり、そしてそこに福音がある。そこに生きるキリストが受肉する。

4 聖書において形作られる信仰

ルターにとって聖書とは、神のことばとしての説教において、キリストの出来事に与るためにある。この神のことばの出来事は、聖書が読まれるということの中でどのように起こされていくのか。ルターにとって、説教が神のことばとして働くためには聖書は不可欠のものである。なぜなら、聖書においてこそ、神の働きが神の創りたもうた世界と人々とともにあり、またそのためにあるということを確認されるからである。聖書が私たちのうちに働く神の業としての信仰の源泉なのだ。

個人的な霊的直感などというものは、場合によっては、世界に反し、あるいはこれと遊離したネオ・グノーシス主義に陥る可能性を持つだろう。しかし、ルターはこうした個人的な霊的直感の神秘主義的交流に信頼を置かない。教会の当時の伝統を排しても、普遍的な教会と世界、人々に対する神の福音を確認し得たのは、ルターの個人的な直感によるのではなく、他ならない聖書を読むということによったのである。

例えば、ルターは「詩編序文」の中で詩編を「小さな聖書」と呼び、これが読まれることの中で、私たちの信仰が確かに養われ、キリストに生かされるというのだ。その詩編がなぜ、そのような「小聖書」と呼びうるかということについて、次のようにいっている。

ここ（詩編―筆者）にわれわれは、一人や二人の聖人が行ったことだけではなく、すべての聖徒の頭、す

なわちキリストご自身がなさったことと共に、すべての聖徒がなすことを見出すからである。⁽¹⁵⁾

物言わぬ聖人による他の模範書や聖人物語には、人が模倣することが不可能な行いが少なくないばかりか、それを行うことに危険をもたらし、そして、一般に分派や徒党を引き起こし、その結果、聖徒たちの交わりから引き離すということになるからである。しかし詩編は、徒党から聖徒の交わりへとあなたを支える。なぜなら詩編は、喜びや恐れや、希望や悲しみの中で、すべての聖徒が考え語ってきた通りに考え語ることを、あなたに教えるからである。⁽¹⁶⁾

詩編は、実際に長く礼拝によって歌われてきた祈りであり、賛美であって、多くの人々がこの詩編によってそれぞれに与えられた個々の人生における経験を神のうちに見出し、祈り、生きてきたことが重ねられたことばなのだ。また、それゆえにまたイエス・キリストご自身も深くこれに親しみ、またそれ以上にこの詩編の祈りに生きられたのである。そして、この詩編は、具体的な、喜びや悲しみの経験の只中で、神を求めること、嘆くこと、神を見出すこと、など心のうちに経験される信仰の出来事をことばにして私たちにも教えている。だから、詩編は、そのことによってキリストによって生きられた信仰として、私たちの現実のただ中に隠された神の恵みを見出す信仰を教えるといつて良いだろう。人間が自らでは到達することのできない信仰の恵みを、神ご自身の導きとして私たちに与えるのである。

逆に言えば、すべて信仰者は、詩編を読むことによって、キリストによって生きられた信仰を自らのうちにい

ただいていくのだ。詩編の言葉がキリストのことばであり、それがまた、私の言葉となっていく。これこそ、キリストの信仰（真実）が私のものとして働く、神の業と言えるだろう。そういう道筋の中でこそ、詩編の言葉は、私の信仰の養いの出来事となり得るのだ。

信仰は、単なる観念や何かを信じ込むことではなく、また、現実から精神的な世界への逃避なのでもない。むしろ、生きて働くことばが、私たちの生きる現実の中に隠された神の恵みへと心を開かせ、そうして、私の中にキリストの信仰（真実）をもたらし、この現実の中に生きられる信仰を形作る。端的にいうならば、私のうちにキリストを形作る。

もちろん、ルターは詩編について語っているのだが、基本的に「聖書」とはそのようにして多くの信仰者たちに働いた神のことばを内包しているものとみてよいし、これを読む時には、それらの信仰者に働き、信仰を形作った同じ神の語りかけを聞くことになる。

5 律法と福音

この神の働きは、ルター神学においては律法と福音という神の二つの業とされている。律法と福音は、その聖書を通して信仰者にのぞむ神のことばの働きのことである。もちろん、それぞれの働きがあり、これらを厳密に区別することが必要とされている。律法は、我々が何をなすべきかを教え、福音はすべて必要なことはキリストにおいてなされたことを教える。それぞれにその役割があるとされるのだが、しかし、「ガラテヤ書序文」には

「律法がむしろ義よりも罪と悪行とをいかほど多くもたらすかを示し、神の恵みのみによって約束されている義こそが、律法なしにキリストによって成就され、与えられていることを明らかにする」と記される¹⁷⁾。律法の行いによるのではなく、ただ、福音によってのみ私たちが生かされるという、宗教改革的神学の中心である福音への圧倒的な信頼と、それによってのみ人は生かされることをはっきりと示している。そして、福音が与えるキリストの恵み、いや、キリストご自身がどのように私たちの救いであるかを示して、ルターは次のようにいう。

キリストがその生と教えと働きと死と復活と、彼があり、もち、なし、できるすべてのものと共に、あなた自身のものであることを告げる声があるとこそ、あなたは福音を知っていることになる¹⁸⁾。

福音は、その声を聴くものに、キリストがその人のものであると告げるといふことだ。逆に言えば、福音は、それを聴く一人を、キリストがご自分として生きたもうという出来事そのものを伝えている。

ちょうど、詩編を読むものは、自らの魂をその詩編作者と重ねつつ、同時にキリストの、神の寄り添う恵みのみ業に与る出来事を体験すると言われていたように、みことばに与ることを通して、キリストと一つになり、また同時にすべての聖徒たち、すなわち信仰者との交わり、連帯が形成されるというのだ。

三 まとめ

実は、聖書序文の中に「信仰義認」という具体的な言葉はない。しかし、徹底した神の恵みの働きにおいて、キリストを伝える福音の説教を通し、信仰によってキリストご自身が働き、信仰者に新しい生が起こされる出来事として、神の救いを理解していることが示されている。

聖書は、それ自体というよりも、それが読まれる中で神の声に聞き、みことばがその人に働くその関係において、常に新たに、そのひとりりの人の限界性を打ち破り、神の御心に生かす信仰の源泉だ。そうして、神のことばは、私たちに、互いに愛し合い、支え合う本来の生へと招き、導く働きとなると理解されているのだ。絶えざる神の働きこそが、私たちを新しいのちに生かすのだ。こうして、ネオ・ペラギウス主義の人間の自己責任論は退けられる。むしろ、私たちが決して自らの力によっては生きられないことを明らかにしつつ、神の助けを得て、互いに支え合い、愛し合うことへと生かされることが福音の力であることを知る。

そして、現実の生が、どんなに困難に満ちていても、私たちが閉じこもり、閉ざしたその扉の中にもキリストが入ってこられて、私たちを祝福に満ちし、その現実に関わることへと招き、共に生きることを作り出す。こうして、ネオ・グノーシス主義は退けられる。

こうした神のことばの出来事は、神の恵みによることは間違いないが、聖書を通して語られる福音の説教を通

し、聴く者を捉え働きたもうキリストご自身があることにのみよると言つてよい。そのキリストの働きをこそ、福音の信仰とルターは呼ぶ。それゆえ、ルターにとって、

聖書は、キリストにある命を与える救いのみことばを信仰を通してのみ、それを受け入れる人に伝えるものである。それゆえ、信仰の事柄としての聖書の権威は、聖書の福音の上に置かれてるのであって、信仰告白や教会公会議、あるいは、今日構成や監督制などの階層的に秩序立てられた職務にあるのでもない⁽¹⁹⁾。

とされるのである。

「恩寵義認」と呼ぶことが間違いとは思わない。それは確かに、ある意味で、つまり、救いが人間の功績によるのではなくただ神の恵みの出来事であるという意味で、ルターの神学的な意図を言い当てているだろう。また、初めに記したように、今日的な文脈において意味がある。けれども、ルターの神学的主張を「信仰義認」と呼んできたことの意味だけは、忘れてはならない。つまり、その神の恵み、神のことばは説教されて、信仰を通して、その人自身に生きて働く。その時にのみ、人は救いに与る。その出来事を見失ってはならないと思うのだ。

それは、ルターが、聖書を教会の脈絡においてのみ捉えているということである。もつと言えば、聖書はそのみことばの宣教、つまり説教という脈絡の中においてのみ受け取られるというのである。救いは、まさにそうして神のことばが働く「信仰を通してのみ」、その人に現在する恵みであると知らなければならぬ。

- (1) <http://catholic-inet/bachikan/>・教理省：「キリスト教的救いの観点を明確に」／
- (2) 「ITプラトニズム」については、未だ論文の形では公にしていなかったが、二〇一六年一月一三日に開かれたルター研究所主催の秋の講演会において発表した『キリスト者の自由』と悪の問題―現代社会に生きる魂の問い―では、そのことを具体的に取り上げて話している。
- (3) ニューエイジについては、現代の宗教社会学文献に詳しく記される。例えば、伊藤雅之『現代社会とスピリチュアリティー―現代人の宗教意識の社会的探求』溪水社、二〇〇三年。
- (4) 杉田竜一の『BELIEVE』（発表一九九八年）は愛されて、多くの歌手にカバーされ、合唱曲に編曲され全国の合唱コンクールで最もよく歌われる楽曲の一つとなっている。また、シンガーソングライターの絢香のデビューシングル『I believe』（発売二〇〇六年二月）、合唱曲 Little Gree Monster の『I believe』（発売二〇一九年一月）など、こうした、自分を信じ、未来志向を歌う歌詞が愛されていることがよくわかる。
- (5) 江口再起はルターの信仰義認論が善行（人間の功績）による救いを強調した当時の神学に対して一方的な神の恵み（他力）による救いを強調したものととして、「恩寵義認」という方がルター的であると主張する。『ルターの脱構築―宗教改革500年とポスト近代』リトン、二〇一八年参照。
- (6) ルター「新約聖書序文」『ルター著作集』第二集第五卷、リトン、二〇〇七年、九頁。
- (7) 同前。
- (8) G・アウレン『勝利者キリスト―贖罪思想の主要な三類型の歴史的研究』佐藤敏夫・内海革訳、教文館、一九八二年。
- (9) アルトハウスは、アウレンの主張する「勝利者キリスト」のモチーフがルターにあることは認めるが、ルター

- にももちろんいわゆる充足説としての贖罪理解があること、そして、ルターにとっては「勝利者キリスト」よりも「律法と福音」の方がより重要なモチーフであることを主張している。P. Althaus, *The theology of Martin Luther* (Philadelphia: Fortress Press 1966) 220.
- (10) ルター「ローマの信徒への手紙序文」『ルター著作選集』教文館、二〇〇五年、三六六頁。
- (11) ルター「奴隸的意志について」『ルター著作集』第一集第七卷、聖文舎、一九六六年、三九一―三九二、四七九―四八〇頁など。
- (12) ルター「新約聖書序文」九頁。
- (13) ピノマ『ルター神学概論』石居正己訳、聖文舎、一九六八年、二一八頁。
- (14) ルター「詩編序文」『ルター著作集』第二集第四卷、リトン、二〇〇七年、四頁。
- (15) 同前、三頁。
- (16) 同前、七頁。
- (17) ルター『ルター訳ドイツ語聖書 ガラテヤ人への手紙 一五二二年「九月聖書」―原文・邦訳と解説(徳善義和)』日本聖書協会、二〇一七年、七頁。
- (18) ルター「新約聖書序文」七頁。
- (19) Carl Braaten, *Principles of Lutheran Theology* (Minneapolis: Fortress Press, 2007) 12.